



サウジアラビア国王死去

開発経済調査部長 夏目 憲一

8月1日、サウジアラビアのファハド国王が逝去、後継の第六代国王は統治基本法第二章第5条に基づき、アブドラ皇太子が即位した(駐日サウジ大使館 HP)。

サウジアラビアとはまさにサウード家のアラビアであり、国王は聖俗の両面で絶対な存在である。聖の面では、サウジ国王には、「二大聖地(メッカとメディナ)の守護者」という敬称があり、歴代国王は聖地のモスク整備、拡大に精力を傾けてきた。現在のサウジアラビアの建国は1932年だが、サウード家は十八世紀の第一サウード王国以来ワッハーブ派と呼ばれるイスラム教の純化を唱える一派と結びつき、同派から支配の正統性を与えられてきた。ワッハーブ派はイスラム教スンナ派の中の一の原理主義者ともいえる存在で、同派が主導し、コーラン(とスンナ)を憲法とする政教一致のサウジは、湾岸のイスラム諸国のなかでもとりわけイスラムの教えを厳格に適用していることで知られる。また俗の面では、サウジ国王は二十一世紀の現代では稀な世襲の専制君主であり、上記の通り近代的な憲法は制定されておらず、単なる諮問機関としての「諮問評議会」があるのみで、立法権を有する議会も存在しない。国王が首相、皇太子が第一副首相に就いており、内閣も王族主体の構成である。

周知の通り、サウジは日本にとり最大の原油供給国であるだけでなく、日系企業による石化、淡水化プロジェクトの推進等経済的に重要な存在である。因みに、今年は日本と同国との国交樹立50周年にあたる。サウジの原油生産量は、日産905万バレル(2004年)で勿論世界一(シェア12%)。今後の生産量を左右する原油確認埋蔵量においては、データの出所により若干の増減はあるが、2628億バレルと世界全体の約四分の一を占めており、生産余力(日産200万バレルで世界全体の五分の四と言われる)、生産コストの安さもあり、市場への影響力は極めて大きい。当然、同国経済は石油主導型となり、輸出の約九割、国庫歳入の約七割を石油が占めている。2003年のGDPは1,882億ドルで、前年比6.4%の成長。石油価格が続伸した昨年、今年は更なる成長が見込まれるが、逆に原油価格の低迷した時期を含むそれまでの5年間(1997年-2002年)のGDP成長率の平均をとると、2.2%となり、人口増加率(3.4%)を下回っている。また、同国人口は、増加を続け、2,085万人(2000年)に達している。人口一人あたりGDPは、日本の四分の一にあたる約9,000ドルであるが、外国人労働者(526万人)の存在を勘案しても、金満国サウジのイメージからすれば、必ずしも高くはない。(以上の数値は、サウジ企画省及びサウジアメリカバンクより。)

サウジでは、オイルショック以後潤沢な石油収入を活用して、社会福祉やインフラの整備を進めてきたが、増加する人口の受け皿となる新産業を育成できたとはいえない。25歳以下の若年層が人口の三分の二を占めるが、若年層を中心に失業率は12.5%に上っている。また、六千人とも三万人ともいわれる王族が富を独占しており、極端な貧富の

差が、失業と相まってテロリストの温床となっているとの見方も強い。中東における民主化を志向する米国からの要求もあるが、今年になって初めて地方評議会において直接選挙が実施されたのみで、秘密警察による民主化勢力への締め付けは依然続いている。

湾岸戦争の際に、聖地の守護者であるサ우드王家自身が、クウェート首長の二の舞は演じまいと、自己保全から異教徒の軍隊(米軍等)を引き入れ、聖地を汚したとして、イスラム原理主義者から批判があり、それがテロリストに名分を与えている。それ故、王家の正統性保持の観点からは、イスラム教ワッハーブ派との提携、厳格なイスラム法支配の継続は必須である。他方で、それと相反する米国からの民主化要求は依然強い。更に、王族の富の独占、腐敗への批判、増大する若年層の不満も放置できない状況となっている。油価が高騰している状況下、財政を通じ、民心を繋ぎとめることはある程度できようが、正統性を維持しつつ、改革を進めることは容易ではない。

前掲のサウジ統治基本法では、「王国の統治は、建国の父アブドルアジーズの子及び孫にゆだねられるものとする。その中の最もふさわしいものがコーランとスンナの導きにより王位につくものとする。」と定められており、必ずしも皇太子が自動的に王位を継承するような規定はない。とはいえ、アブドラ新国王は皇太子時代から政治的に重きをなしてきており、新皇太子となるスルタン国防相との確執等伝えられていたとはいえ、王位継承が当然視される存在であったようだ。新国王は、元来は保守派に属するともいわれているが、皇太子時代から病気のファハド国王に代って、民営化、外資導入、王室財政の緊縮化や前述の地方選挙など、漸進的な改革策を主導してきた。米国からの支持も引き続き強いが、王族の一部には既得権にしがみつき、こうした新国王の改革に異を唱える向きもある。新国王、及びスルタン新皇太子はともに初代アブドラアジーズ国王の息子であり、いずれも八十歳前後の高齢。第二代サ우드国王からの異母弟相続は、年齢的に限界に来ている。次世代としては、スルタン皇太子の息子であるバンドル王子やファイサル国王の息子サ우드外相、トルキ駐米大使等が知られているが、王位の「次の次」はまだ見えない。

報道によれば、故ファハド国王の葬儀は、ワッハーブ派の流儀に則り、簡素に行われた。活発な弔問外交も展開された模様だ。民主化勢力の拘束、インターネットサイト検閲等ハード、ソフト両面における強権支配もあり、体制は表面的には安定しているが、前述の通り王国内部の流動化に結びつく萌芽は見逃せない。基盤である王族自体も一枚岩とは言えぬなか、新国王にとっては次世代への円滑な継承をも睨みながらの難しい舵取りとなる。

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しく申し上げます。当資料は信頼できるとされる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2005 Institute for International Monetary Affairs (財団法人 国際通貨研究所)

All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.

Address: 3-2, Nihombashi Hongokuchō 1-Chōme, Chūō-ku, Tokyo 103-0021, Japan

Telephone: 81-3-3245-6934, Facsimile: 81-3-3231-5422

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-2

電話 : 03-3245-6934 (代) ファックス : 03-3231-5422

e-mail: admin@iima.or.jp

URL: <http://www.iima.or.jp>